

# 山村集落の生活と意識

——飯山市小菅集落における生活環境意識——

渡 邊 勉  
(信州大学人文学部)

## 1. 山村集落における生活と意識の関係

### 1.1 目的

本稿は、2003年11月に飯山市小菅集落でおこなわれた『山村集落の世帯維持と継承に関する調査』から得られた59世帯のデータ分析を通じて、山村集落における集落内の社会的活動を中心に、近隣関係と生活条件に関する意識の実態を報告し、さらにその規定因について検討することを目的とする<sup>1</sup>。

山村集落にとって現在最大の問題は、おそらく過疎化と高齢化の問題であると考えられる。この問題を解消するためには、若い世代が新たに集落に移住する、あるいは転出せずに定着する必要がある。集落に人々が定住していくためには、さまざまな制度的、社会的整備が必要であることは、まずもって重要であろう。しかしそれと同時に、いかにして集落への愛着心を形成するか、近隣のつきあいに心地よさを感じるか、生活に満足するかといった、集落に住むことへの肯定観の形成も重要であろう。本稿は、後者の意識面に注目しながら、人々が集落での生活を肯定的に捉える意識の形成条件を検討していく。

もちろん、現在居住している住民の意識だけでは、集落維持のための規定因は正確にはわからない。すでに集落を離れていった住民の意識との比較を通じてはじめて、集落維持のために必要とされる意識、規定因が明らかになる。ただ、本研究のもとになっている調査データからでは、すでに集落を離れている住民の意識や行動についてはわからないため、比較は不可能である。そこで本稿では、集落の生活に対する肯定的な意識がこれから先長期にわたる集落への定着につながっていくと仮定し、現在集落に住む人々の集落の生活に対する意識がどのような要因によって規定されているかを探ることで、集落を維持していくための方策を考えていくことにする。

山村集落での生活は、都市での生活よりも家族や地域との密着の度合いが高いといわれる。しかしその一方で、戦後の都市化、産業化の進行の中で、山村や農村における集落内のつながりも変容してきているといわれている。こうした戦後の急激な社会変動にともない、大きく変容した集落の中で山村集落を維持していくためには、集落の近隣関係や生活への肯定的な意識がどのように形成されているのかを明らかにしていくことが重要な課題であろう。

具体的に本稿では、2つの課題に答えていく。まず、近隣関係と生活条件の現状について記述する。近隣関係に対する肯定観、生活条件に対する肯定観、近隣関係の意識を形成する基本的要素である集落内での社会的活動の現状について、記述する。次に、近隣関係および生活条件の意識を規定する要因について検討する。その中から、集落維持のための基本的要素である集落の生活への肯定観を作り出すメカニズムについて考察する。

<sup>1</sup> すでに本調査の第一報は、別稿によって報告しているのでそちらも参照（村山 2004、中原 2004、渡邊 2004）。

## 1.2 小菅集落調査について

分析に入る前に、小菅集落と今回の調査の概要について簡単に述べておく（村山 2003）。

小菅集落は、飯山市の山間部に位置する山村集落である。飯山市から千曲川を隔てた東側の小菅山の斜面に位置する。山間部といっても集落中心部の標高は約500mほどでそれほど高くはない。飯山市市街地の標高が約320mなので、標高差は180mに過ぎない。しかし飯山市は豪雪地帯であるため、180mの標高差は、実際には集落の冬の生活を厳しいものになっている。

小菅集落の特徴は、2つある。一つは小菅神社であり、もう一つは美しい自然環境である。

小菅集落は、小菅神社の歴史と共に古い歴史を有している。小菅神社は、平安時代末期には飯縄、戸隠と並ぶ修験道の聖地として栄えていたとされている。そして修験道により寺社がこの地に集まり、小菅集落自体中世末から近世にかけて栄えていたといわれている。しかし近世以降、このような歴史は忘れられ、集落も徐々に規模を小さくしていった。現在でも、歴史的遺構は至る所に残されており、繁栄時を偲ぶことができる。こうした歴史的遺構は3年に1度おこなわれる小菅の大祭（祇園祭）とともに、貴重な文化財として近年注目されている。

小菅集落のもう一つの特徴は自然環境である。小菅神社に続く参道にある杉並木は、樹齢300年といわれており、長野県天然記念物にも指定されている。また小菅地籍内には北竜湖がある。春の菜の花、桜、秋の紅葉が美しく、有名である。

小菅集落は、一方で高齢化や過疎化といった問題をかかえているが、他方で歴史的遺産と美しい自然環境を備えた場所だといえる。小菅集落に住む人々の意識や行動を明らかにするためには、こうした小菅集落特有の特徴というものを念頭におく必要がある。そこで我々はこれらの特徴を踏まえた上で調査設計をおこない、調査を実施した。

信州大学社会学研究室では、2003年11月7日～9日に、飯山市の小菅集落（飯山市大字瑞穂）内の全69戸の世帯主を対象とした全戸調査を実施した。対象世帯にはあらかじめ調査依頼を郵送および電話にておこない、事前に電話で連絡がとれなかった世帯については調査期間中に直接訪問して依頼している。調査対象69戸のうち、移転・病气・不在などによる調査不能が6戸、調査拒否が4戸であり、最終的な有効戸数は59戸（計画対象者数69戸に対して85.5%、有効対象者数63戸に対して93.4%）であった。調査は調査員（信州大学人文学部社会学専攻の学生）が対象世帯を訪問し、調査票に基づく構造化された形式の質問と、関連する自由な回答を記録する、他記式半構造化面接法を用いている。

## 2. 小菅集落の生活と意識

### 2.1 小菅集落の環境に関する意識

まず、小菅集落での自然、生活環境に関する意識から見ていくことにしよう。本調査では、小菅集落での生活について、世帯主に意見を尋ねている。そのうち3つの項目が、小菅集落の環境（自然、生活、近隣）に関する項目である。まずそれぞれの分布を見ていくことにしよう。第1に自然環境については、全体の85%の世帯主が肯定的（非常に良い＋まあ良い）に捉えており、大部分が自然環境を良いものと評価している（図1）。第2に、交通や買い物などの社会的な生活条件については、逆に肯定的意見が34%と低く、否定的意見が42%と肯定的意見を上回っている（図2）。現在の生活の不満を尋ねた別の質問では、不満の理由として交通の便を挙げる者が14名と最も多く、

続いて雪かき（11名）が続いている。このことから、集落の人々は社会的な生活条件として、主として交通や雪の問題を念頭に置いていることが予想される（詳しくは後述する）。第3に、集落の活動や近所づきあいについては、肯定的意見が62%と半数以上を占めている（図3）。ただ普通を含めると、肯定的とはいえない意見も、38%と無視できない数存在している。

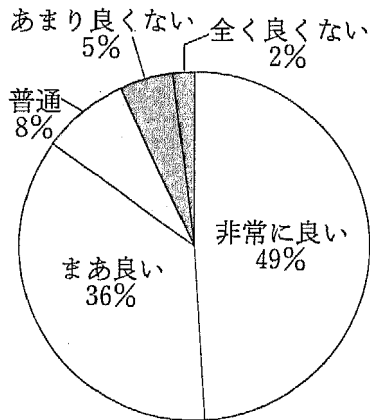


図1 自然条件に対する肯定観

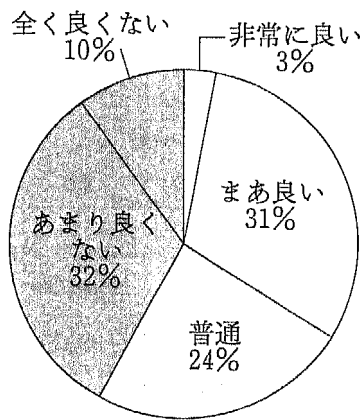


図2 生活条件に対する肯定観

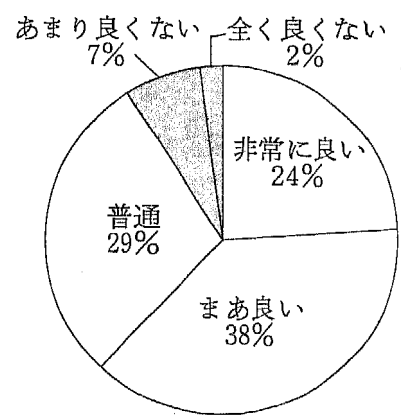


図3 近隣関係に対する肯定観

以上をまとめると、小菅集落の自然環境に対する人々の意識は大部分が肯定的であり、集落内で大きな相違が見られない。それに対して、生活条件と近隣関係については、集落内で違いが見られる。その理由は、これら2つの意識が社会環境によって大きく影響されるためであると考えられる。つまり自然環境は、集落内に住む人々にとってほとんど同様であるが、社会環境は人々の属性や人間関係によって大きく異なってくるからだと考えられる。集落に対する肯定的意識を形成する要因を社会的に探るとするならば、社会環境と集落に対する肯定観の関係に焦点を当てる必要があると思われる。そこで本稿ではこの2つの意識、つまり近隣関係に対する意識と生活条件に対する意識に注目して分析をおこない、肯定的意見と否定的意見を分ける要因が何であるのかについて検討していくことにする。

## 2.2 近隣関係と生活条件の肯定観

まず近隣関係と生活条件に対する肯定観について、基本的項目との関係を押さえておくために、男女別、年齢別で分布を見てみた。

まず近隣関係について（表1）は、男女別でほとんど違いがない。「非常に良い」では女性が、「まあ良い」では男性の比率が高いが、肯定的意見全体として大きな差はない。一方年齢別で見ると、60歳以上の高齢者層において肯定的意見が多いことがわかる（表の網掛け部分）。逆に60歳未満では、「普通」が多い。ただ年齢によって明確に肯定観が規定されているというわけではなく、70歳以上においても12.5%が「あまり良くない」と回答している。単純に年齢が肯定的意見につながっているわけではなく、さらに別の要因があることが示唆される。さらに否定的意見に注目すると、世代によってほとんど違いがない。集落の人間関係は濃密であり、若い世代にはそれが煩わしいとも考えられるが、そうした傾向は見られない<sup>2</sup>。

<sup>2</sup> この結果は集落内の人々に対する調査であるからとも考えられる。集落内の人間関係を煩わしいと感じている人々は、すでに都市に流出している可能性が高いからである。

表1 性別、年齢別近隣関係に対する肯定観

	非常に良い	まあ良い	普通	あまり良くない	全く良くない	計(実数)
女	50.0	10.0	20.0	20.0	0.0	100.0(10)
男	18.4	44.9	30.6	4.1	2.0	100.0(49)
50歳未満	25.0	25.0	37.5	0.0	12.5	100.0(8)
50～59歳	16.7	25.0	50.0	8.3	0.0	100.0(12)
60～69歳	20.0	53.3	26.7	0.0	0.0	100.0(15)
70歳以上	29.2	41.7	16.7	12.5	0.0	100.0(24)

次に生活条件に対する肯定観(表2)についても、男女別でほとんど差がない。また年齢別でもほとんど差がみられない。60歳以上の高齢者層で、否定的意見(あまり良くない+全く良くない)が若干多いが、顕著な差があるとはいえない。小菅集落が客観的には不便と考えられる山村集落であり、高齢者にとって便利な環境だとは考えにくいにも関わらず、肯定的意見が多いのが特徴である。この事実から単に性別や年齢と、生活条件に対する肯定観の間に強い関係があるとはいえない。

表2 性別、年齢別生活条件に対する肯定観

	非常に良い	まあ良い	普通	あまり良くない	全く良くない	計(実数)
女	10.0	20.0	10.0	40.0	20.0	100.0(10)
男	2.0	32.7	26.5	30.6	8.2	100.0(49)
50歳未満	0.0	37.5	25.0	25.0	12.5	100.0(8)
50～59歳	0.0	33.3	33.3	33.3	0.0	100.0(12)
60～69歳	6.7	20.0	26.7	26.7	20.0	100.0(15)
70歳以上	4.2	33.3	16.7	37.5	8.3	100.0(24)

以上クロス表を見る限り、性別、年齢といった基本的属性と近隣関係、生活条件に対する意識の間に強い相関関係があるとは考えられない。性別や年齢によって、集落内での社会状況が異なるはずであるにもかかわらず、強い関係が見いだせないのは注目に値するだろう。

### 2.3 近隣関係の社会活動状況

次に実際に、集落の世帯主の社会的活動状況の現状を見てみよう(表3)。集落の社会的活動状況については、集落組織の役員経験、現在の小菅神社の活動、集落内の趣味のグループや講への参加、集落内における同族間の交流の4つの項目で有無を尋ねている。まず集落組織の役員の経験については、約75%が「経験あり」と回答している。具体的な内容は、区長、副区長が最も多く、経験者の56%は区長の経験がある。あとは、消防関係(19%)や公民館関係(16%)、水管理関係(12%)などが多い<sup>3</sup>。次に、小菅神社の活動を現在本人もしくは家族がつとめているかについて

<sup>3</sup> 複数の役職を経験している方が多いので、全部足すと100%を越える。

は、約半数の48%が現在活動しており、小菅集落の人間関係の中心の一つが神社であることが伺える。内容は氏子総代が36%と最も多い。また集落内の趣味のグループや講への参加については、約31%が参加している。グループの活動内容は、小菅や飯山の歴史を学ぶ活動が最も多く39%となっており、小菅集落の持つ歴史性が集落内の人間関係の触媒の役割を果たしていることが伺える。続いてスポーツが28%となっている。なお講を挙げている者はいなかった。さらに集落内における同族間の交流（協議や協力）の有無については、約36%がありと回答しており、その内容は冠婚葬祭が中心である（33%）。

表3 社会活動の有無

	%	
	あり	なし
集落経験	74.6	25.4
神社役員	47.5	52.5
グループ活動	30.5	69.5
同族交流	35.6	64.5

また、おこなっている社会活動数の分布を見てみると、図4のようになる。

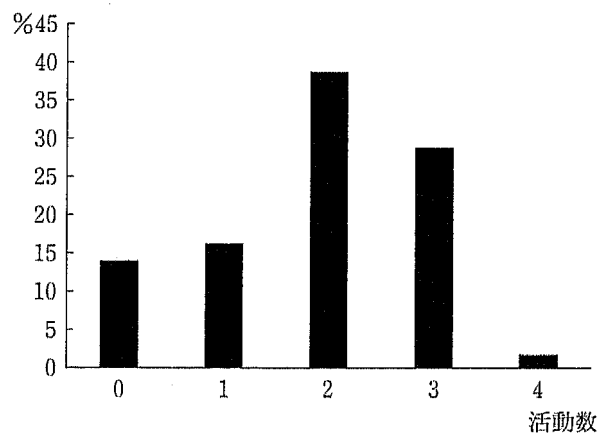


図4 社会的活動数

図4から、2つの活動をおこなっている世帯主がもっとも多く、全体の4割程度となっている。また全く活動をおこなっていない世帯主も13.6%いる。逆に4つの活動すべてをおこなっている世帯主は1名のみ（1.7%）と、意外と少ない。

単純集計や分布だけでは、各世帯主がどの活動をおこなっておりどの活動をおこなっていないかはわからない。そこで次に、4変数について世帯の社会的活動のパターンをさぐってみる。こうした場合、通常クロス表分析をおこなうことになるが、4重クロス表は煩雑であり、パターンを見いだすことが難しい。そこで、本稿ではブル代数分析によってパターンを析出していくことにする<sup>4</sup>。

<sup>4</sup> ブール代数分析には、Tosmana ver.1.1 (Cronquist 2003) および QCA3.0 (Drass and Ragin 1998) を使用した。

ブール代数分析とは、ブール演算によって複雑な因果関係を解明するための分析手法である<sup>5</sup>。ブール代数分析の利点は、少数事例の分析に適していること、複雑な交互作用を分析できることが挙げられる。本稿の分析目的に照らしてみると、ブール代数分析は4つの変数についてどのような組み合わせパターンが多いかについて、59という少数の事例から複雑なパターンを抽出することができるという利点がある。

ブール代数分析をおこなうために、まず真理表を作成する(表4)。真理表ではすべての変数について、2値変数としなければならないので、次のように変数を定めた。

(1) 集落の役員

1: 経験有り、0: 経験無し

(2) 小菅神社の役職

1: 務めている、0: 務めていない

(3) グループ、講

1: 参加している、0: 参加していない

(4) 同族

1: 交流あり、0: 交流なし

(5) 世帯数の多少

各パターンについて、6世帯以上(全サンプルの約10%)含まれている場合について、多いと見なし、5世帯以下の場合には少ないと見なした。

1: 多い、0: 少ない

表4 真理表

	社会的活動				世帯数	世帯数の多一少
	集落A	神社B	グループC	同族D		
1	0	0	0	0	8	1
2	0	0	0	1	3	0
3	0	0	1	0	2	0
4	0	0	1	1	0	0
5	0	1	0	0	1	0
6	0	1	1	0	0	0
7	0	1	0	1	1	0
8	0	1	1	1	0	0
9	1	0	0	0	4	0
10	1	0	1	0	6	1
11	1	0	0	1	6	1
12	1	0	1	1	2	0
13	1	1	0	0	10	1
14	1	1	1	0	7	1
15	1	1	0	1	8	1
16	1	1	1	1	1	0

<sup>5</sup> 詳しくは、Ragin (1987=1993)、鹿又他編 (2001) を参照。

真理表をもとに、世帯の社会的活動の存在条件（R）を求めると、次のようになる。

$$\begin{aligned}
 R &= abcd + AbCd + AbcD + ABcd + ABCd + ABcD \\
 &= AcD + ACd + ABc + abcd \\
 &= A(cD + Cd + Bc) + abcd
 \end{aligned} \tag{1}$$

例えば、AcDとは集落の役員経験があり、かつグループ参加はしておらず、さらに同族のつきあいのあるパターンであることを指し、こうした属性を持つ世帯が多く存在することを示している。なお、式(1)によって全体の76%（45世帯）を説明しており、大部分の世帯の社会活動の組み合わせが説明可能である。なお、ブール代数分析の結果を図示したものが、図5である<sup>6</sup>。図5について簡単に説明しておこう。まず社会的活動ごとに図内に枠が設けられている。例えばすべての活動をしていない組み合わせ（0000）は左上の枠に位置し、すべての活動をしている組み合わせは中央右下に位置している。枠の位置は、1番目の変数（集落活動）が1か0かで右半分か左半分かが決まり、2番目の変数（神社活動）が1か0かで上半分か下半分かが決まる。それぞれの枠の左上、あるいは右下にそれぞれの変数の値が記されている。さらにそれぞれの枠は存在条件（R）の値（0か1）によって色分けされている。このように図示することで、どのような組み合わせが存在する（R=1）かが視覚的に確認できる。

ブール代数分析の結果から、次の2つの点に注目できる。第1に、世帯主の社会的活動は大きく2つのパターンが存在する点である。第1のパターンは集落の役員を経験したことのあるパターンである。集落の役員経験者が全体の75%に及ぶことを考えれば、当然といえば当然である。特に集落経験と神社の活動をおこなっている者が、25人もおり（AB）、半数近くの者がこのパターンに含まれる。このことは、集落において自治会活動と神社をめぐる活動が、近隣関係の活動の中心であることを示していると思われる。集落経験者は神社の活動だけではなくグループ活動、同族の交流のいずれかの活動も併せ持ちつつも、逆に少なくともどれか一つの活動はしていない。第2のパターンは、どの活動にも参加していないパターンである。このパターンは13.6%（8世帯）ある。集落活動や神社を中心とした活動が活発におこなわれている小菅集落においても、社会的活動と距離をおいた者が少なからず存在している。

第2に、グループ活動と同族交流の2つの活動をかねるパターン（\*\*11）がない（ケース数が非常に少ない）ということである<sup>7</sup>。図5の中央の4つのセルがこのパターンに対応している。グループ活動と同族交流は、そもそも対称的な活動である。グループ活動は、趣味など個人の嗜好に基づく非伝統的で選択的な活動であるのに対し、同族交流は、血縁に基づく伝統的で非選択的な活動として特徴づけられる。両行動が両立しないという事実は、どのようなことを含意しているのだろうか。グループ活動と同族交流は二律背反的な活動を示唆しているのか。つまり一方の活動をする、もう一方の活動はできない社会的状況があるのか。それとも代替可能な活動であり、一方の活動が他方の活動と機能的に同一であり、一方をおこなえば他方をおこなう必要がないということな

<sup>6</sup> Tosmana の visualize 機能による。

<sup>7</sup> ここでの分析では、6サンプル以上を存在するとしているため、5サンプル以下は存在しないとなる。実際には、3サンプルにおいてグループ活動と同族交流があるが、全体における比率は約5%と非常に小さい。

のか。同族交流の主たる内容が、冠婚葬祭であることから、グループ活動と同族交流が機能的に一致するとは考えにくい。かといって、グループ活動と同族交流が二律背反的な活動であるとも想定しがたい。本分析ではこれ以上は明らかにできず、今後の検討課題としたい。

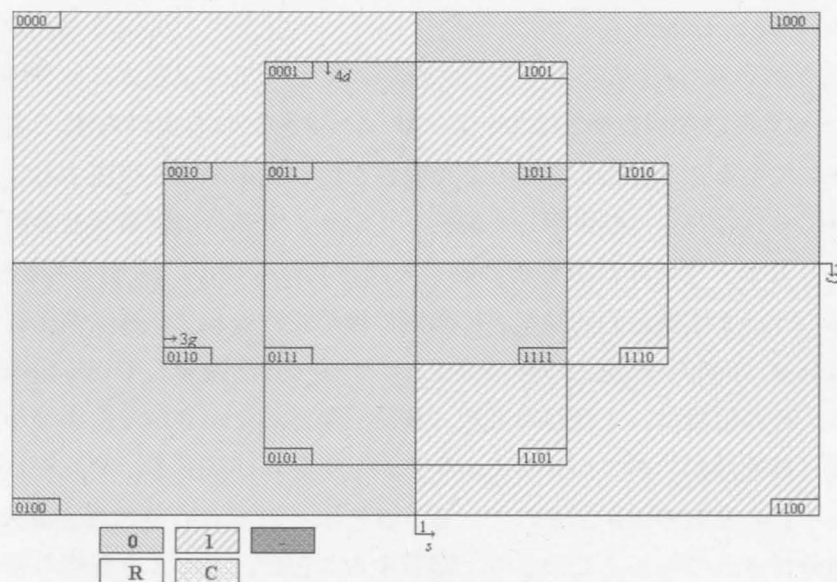


図5 社会的活動パターン図

### 3. 近隣関係への肯定観の規定因

それでは次に、近隣関係への肯定観を規定する要因について、検討していくことにしよう。

近隣関係に対する肯定観の規定因を考えていく際、最も重要となるのはフォーマル、インフォーマルな近隣ネットワークの形成であると考えられる。つまり近隣ネットワークをうまく形成している者は、近隣関係に肯定的な意見を持ち、近隣ネットワークをうまく形成していない者は近隣関係に肯定的でない意見を持つと考えられる。もちろん近隣ネットワークが形成されているからといって、肯定的になるとばかりはいえない。密な関係を結べば結ぶほど、愛憎ともに増加することはありうる話である。ただ本稿で扱うデータの場合、近隣ネットワークの形成が肯定的な意見を形成していると仮定できると考えられる。それは、仮に近隣ネットワークの形成によって近隣に対する嫌悪感が強くなっていく者は、転居している可能性が高いため、そもそも本稿で対象としているサンプルには含まれないからである<sup>8</sup>。

では近隣ネットワークは、どのような要因によって規定されているのだろうか。大きく3つの要因にまとめることができるだろう。第1に、近隣関係を維持していくためのフォーマルな社会的活動である。社会的活動については、活発であるほど近隣ネットワークをうまく形成することができ、それにより近隣関係に対して肯定的な意見を持つと予想される。

<sup>8</sup> もちろん、この仮説についても嫌悪が強くても移動できない状況におかれている人がいることは十分に考えられる。ただ本稿ではその可能性はあまり高くないと考えている。それは、小菅集落の世帯数は戦後急速に減少しており、集落からの転出の阻害要因がそれほど高いとは考えられないからである。また本来であれば、良好な人間関係を形成する近隣ネットワークがどのように形成されるのかについて検討する必要があるが、本稿ではデータの性質上、そうした分析も難しい。また本来であれば、親密な近隣ネットワークを形成する要因こそが検討されなければならないが、本稿では取り上げる紙幅がないので今後検討していきたい。



仮説1：社会的活動が活発なほど、近隣関係に対して肯定的な意見を持つ。

具体的には、神社活動とグループ活動を取り上げる。神社活動については、小菅集落にとって小菅神社が重要な意味を持つことから、集落の近隣関係上で、重要な活動であると考えられる。また神社活動は自発的に参加可能な活動というよりは、集落に住んでいる者の責務という位置づけであろう。一方グループ活動については、4つの社会的活動の中では唯一自発的に参加可能な活動である。自発的な活動が近隣関係に対して肯定的な意見につながるのかを探るためにも、グループ活動を取り上げることに意味があると思われる。

第2に家族状況である。特に世帯人数を取り上げる。世帯人数が多いことは、近隣ネットワークの形成に対して2つの作用があると考えられる。

一つは、世帯の他のメンバーを通じてフォーマル、インフォーマルな近隣ネットワークを形成していくことが可能となる。他の世帯構成員がネットワークのブリッジの役割を果たすのである。つまり世帯人数が多いほど、近隣ネットワークを形成、拡大する可能性が生じることによって、近隣関係に対して肯定的な意見を持つようになるだろう。

その一方で、世帯人数が多いと、世帯の中のコミュニケーションでコトが足りてしまう可能性もある。他の世帯構成員がブリッジの役割を果たさず、閉じたネットワークに閉じこもってしまう。逆に世帯人数が少ないと集落内で生活していくために積極的に近隣ネットワークを形成する契機をつくりだす。そのため世帯人数が少ないほど、近隣ネットワークを形成する可能性が生じ、近隣関係に対して肯定的な意見を持つようになるだろう。

仮説2-1 世帯人数が多いほど、近隣関係に対して肯定的な意見を持つ。

仮説2-2 世帯人数が少ないほど、近隣関係に対して肯定的な意見を持つ。

第3に本人の属性である。特に年齢を取り上げる。年齢は、2つの点で近隣関係に影響を与えると考えられる。第1に、年齢が高いほど集落での生活が長いという点から、密なネットワーク（強い紐帯）を形成しやすいと考えられる。第2に、年齢が高いほど昔の集落の慣習、伝統に従った濃密な人間関係を形成していると考えられる。以上の点から考えると、年齢が高くなるほど、フォーマル、インフォーマルな近隣ネットワークを形成しやすく、よって近隣関係に対して肯定的な意見を持つと考えられる。

仮説3 年齢が高いほど、近隣関係に対して肯定的な意見を持つ。

以上の仮説1から仮説3までを検討するために、再びブール代数分析をおこなう。

まずは、真理表を作成するために、以下のように変数を設定した。

(A) 同族の交流

1：交流あり、0：交流なし

(B) グループ活動

1：グループ活動あり、0：グループ活動なし

(C) 世帯人数

1：2人以上、0：1人

(D) 年齢

1：65歳以上、0：64歳未満

(R) 肯定観

肯定観については、「非常に良い」と「まあ良い」を肯定と定義し、「普通」と「それほど良くない」、「全く良くない」を反肯定と定義した。その上で、全事例のうち肯定事例が5割を越える場合1、5割以下の場合0と定義した。

1：肯定、0：反肯定

以上のように変数を設定した後、真理表を作成した（表5）。

表5 真理表（近隣関係の肯定観）

	原因条件				肯定観事例数	全事例数	肯定観R
	神社A	グループB	世帯C	年齢D			
1	0	0	0	0	1	4	0
2	0	0	0	1	6	8	1
3	0	0	1	0	5	8	1
4	0	0	1	1	1	1	1
5	0	1	0	0	1	1	1
6	0	1	0	1	2	4	0
7	0	1	1	0	2	3	1
8	0	1	1	1	2	2	1
9	1	0	0	0	1	3	0
10	1	0	0	1	7	8	1
11	1	0	1	0	0	3	0
12	1	0	1	1	1	6	0
13	1	1	0	0	1	1	1
14	1	1	0	1	1	1	1
15	1	1	1	0	2	2	1
16	1	1	1	1	4	4	1

真理表をもとに、肯定的意見を持つための条件をブール代数分析によって求めると以下のようになる。

$$R = aC + AB + Bd + bcD = B(A + d) + aC + bcD \quad (2)$$

また肯定的ではない意見については、次のような条件式が導出できる。

$$r = AbC + bcd + aBcD \quad (3)$$

肯定的意見形成の条件は、式(2)より、大きく3つに分けられる。第1にグループ活動をしており、かつ神社活動をしているかもしくは年齢が低い場合である。第2に神社活動をしていないが世帯人数の多い場合である。第3にグループ活動をしておらず世帯人数が少なく年齢が高い場合である。

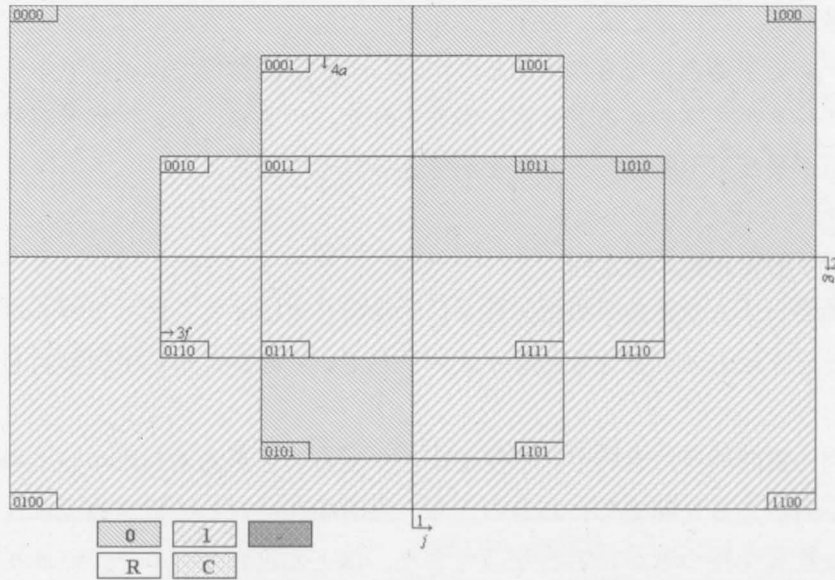


図6. 近隣関係肯定観ブール代数分析結果図

この結果は、先の仮説とどのような関係にあるのだろうか。まず社会的活動の影響については、図6の下半分がほとんど1であることからグループ活動の影響が認められる(B)。ただグループ活動をしている高齢者については肯定的ではない<sup>9</sup>。逆に神社活動が肯定的意見につながっているという事実は見いだせなかった(図6の右半分)。このことは、近隣関係への肯定観が自発的な活動によって作り出されていることを示唆しているものと考えられる。つまり仮説1は社会的活動の内容によっては支持される。次に世帯人数であるが、グループ活動と関係なく世帯人数が多い場合には、近隣関係に肯定的であることが明らかとなった(aC)。つまり仮説2-1が支持された。さらに年齢については、グループ活動をしておらず世帯人数が少ない高齢者の場合に肯定的となる。この結果は、世帯人数が少ない高齢者という点では仮説3と適合的であるが、さらに詳しく見てみると興味深い結果が見られる。

近隣関係に肯定的でない条件(式(3))を見ると、bcdという条件がある。これは、グループ活動をせず、世帯人数が少なく、高齢者でない場合を指し示している。肯定的な条件に、bcDがあったことを考えると、社会的活動、世帯人数において同じ条件であっても、年齢が高いか低いかによって意識に差があらわれることを示している。つまり高齢世代の場合、ここでとりあげたようなフォーマルな社会的活動や家族を通じたネットワークがなくても、近隣関係に対して肯定的になっている。それは、おそらくインフォーマルなネットワークを独自に長い間形成してきたことによるの

<sup>9</sup> 実際には、グループ活動をしている高齢者は50%が肯定、50%が否定となっており、このパターンは解釈が難しい。

ではないかと考えられる。同じロジックに従えば、逆に若年・中年世代（65歳未満）は、フォーマルなネットワークがなく、また家族を通じたネットワークもない場合には近隣関係に肯定的になれないということである。

このことから、若年・中年世代においては、何らかのフォーマルなネットワークチャンネルを通じて、近隣関係への意識が形成されていくと考えられるのに対して、高齢世代では、そうしたフォーマルなネットワークとは別の、独自のインフォーマルなネットワークが近隣関係の意識を形成していることが予想される。このことは、若年・中年世代では近所づきあいはフォーマルなチャンネルを通じたネットワークを主体としたものであるのに対して、高齢世代ではインフォーマルなチャンネルを通じたネットワークが主体であるとも言い換えられる。つまり、若い世代と高齢世代では、近隣関係の質そのものが異なる可能性があることが考えられるのである。

#### 4. 生活条件に対する肯定観の規定因

次に、生活条件に対する肯定観の規定因について検討していくことにしよう。その前に、人々が生活条件といったときにどのようなものをイメージしているのかについて、検討しておくことが必要であろう。

本調査では、別の質問項目において、不便なことや困ることがあるかについて尋ねている。その結果によると、不便があると回答した35名のうち、生活条件に対して肯定的ではない意見を持つ者は19名、肯定的な意見を持つ者が16名となっており、ほとんど差がない<sup>10</sup>。つまり、生活における不便の有無と生活条件への肯定観はかならずしも、一致しない。表6を見ると、65歳未満の場合生活の不便を感じている者の57.1%、65歳以上の場合38.1%が生活条件に肯定的である。逆に生活の不便を感じていない者の18.2%（65歳未満）、30.8%（65歳以上）が生活条件に肯定的ではない。

表6 生活の不便さと生活条件肯定観

		%		
		生活条件肯定観		計（実数）
		肯定的	否定的	
65歳未満	不便あり	57.1	42.9	100.0(14)
	不便なし	81.8	18.2	100.0(11)
	計	65.4	34.6	100.0(25)
65歳以上	不便あり	38.1	61.9	100.0(21)
	不便なし	69.2	30.8	100.0(13)
	計	51.5	48.5	100.0(33)

さらに不便さの要因として交通と雪を挙げている者に注目してみよう。交通に関する不便さについては、65歳未満では交通の不便さと生活条件肯定観はほぼ一貫している（表7）。それに対して65歳以上では、交通の不便さと生活条件肯定観はあまり関係がない。

<sup>10</sup> 肯定的意見を持つ者とは、「非常に良い」「まあ良い」「普通」を選択した者、否定手意見を持つ者とは、「あまり良くない」「全く良くない」を選択した者と定義した。

表7 交通の不便と生活条件肯定観

%

		生活条件肯定観		計（実数）
		肯定的	否定的	
65歳未満	不便なし	77.3	22.7	100.0(22)
	不便あり	0.0	100.0	100.0( 3)
	計	68.0	32.0	100.0(25)
65歳以上	不便なし	56.5	43.5	100.0(23)
	不便あり	36.4	63.6	100.0(11)
	計	50.0	50.0	100.0(34)

また雪に関する不便さについては、高齢者で雪に関する不便を感じている場合には不便さと生活条件肯定観の間に関連が見られるが、それ以外では年齢に関係なく全体としてあまり不便さと生活条件肯定観の間には関係がない（表8）。

表8 雪の不便と生活条件肯定観

%

		生活条件肯定観		計（実数）
		肯定的	否定的	
65歳未満	不便なし	70.0	30.0	100.0(20)
	不便あり	60.0	40.0	100.0( 5)
	計	68.0	32.0	100.0(25)
65歳以上	不便なし	55.2	44.8	100.0(29)
	不便あり	20.0	80.0	100.0( 5)
	計	50.0	50.0	100.0(34)

これらの事実からわかることは、65歳未満の者については、交通の問題という特定の問題が生活条件につながっていると考えられるのに対して、65歳以上の高齢者にとっては、生活条件は単に交通の便や雪かきの大変さといった問題だけではない別の問題があると思なすことができる<sup>11</sup>。

以上の分析をふまえて、生活条件に対する肯定観がどのような社会的要因によって規定されているのかを、再びブール代数分析によって明らかにしていくことにしよう。生活条件への肯定観を規定する社会経済的要因として、本稿では主として2つの要因について検討する。第1は本人の属性である。特に年齢と職業について検討する。

まず年齢については、年齢が高くなるほど体の融通が利かなくなってくる可能性が高く、また車の運転などにも支障が出てくる可能性があることから、年齢が高くなるほど、生活条件に肯定的ではなくなると考えられる。

<sup>11</sup> 高齢者にとって具体的に生活条件とは何なのか。本調査の質問文から、さまざまな要因の可能性を探ってみたが、本調査の範囲内では明らかにできなかった。

仮説4 年齢が高くなるほど、生活条件に対して否定的になる。

次に職業については、具体的には有職であるかどうかを検討する。職を持っているということで、仕事により集落から外へ出て行く機会が多くなるだろう。逆に無職になると自らで機会を作り出さないとなかなか外に出る機会がなくなってしまう。つまり、有職者と無職者では2つの意味において状況が異なる。まず有職—無職により日常生活の範囲が異なる。そのため、生活範囲の広い有職者のほうが、小菅集落自体の生活条件が生活全体に占める割合が低いため、小菅の生活条件への重み付けが小さく、否定的でなくなる可能性があると考えられる。さらに、有職者のほうが職を持っていることで、より活動的にならざるをえない（あるいは活動的な者が仕事をしている）。そして活動的であるほうが、それだけ厳しい生活条件に対しても対応でき、生活条件に対する不満が小さいと考えられる。つまり有職者のほうが無職者に比べて、生活条件に対して肯定的になると予想される。

仮説5 有職者のほうが無職者よりも、生活条件に対して肯定的である。

第2に、家族構成の影響を検討する。生活するための基本的単位が家族であることを考えれば、家族形態が生活条件への意識に影響していると考えられる。家族構成については、2つの変数について検討する。第1の変数は、世帯構成員の平均年齢である。前述したように、年齢が高くなるほど、生活に不便を感じるようになると考えられる。本人が高齢でないとしても、家族内に高齢者が多いことで、さまざまな生活の不便を感じ、それが生活条件に対する意識に反映されると考えられる。第2の変数は、世帯人数である。世帯人数は2つの可能性がありうるだろう。一つは、援助の可能性である。世帯人数が多いことで、自分ではなかなかできないことであっても、他の家族構成員と協力していくことで、互いに生活を支え合うことができる。つまり、世帯人数が多くなることで、生活条件に肯定的になると考えられる。逆の可能性も考えられる。例えば高齢者が多い世帯では、世帯人数が多いと先に述べたように、さまざまな生活の不便を感じる機会が増えるに違いない。そのため世帯人数が増加すると、生活条件に否定的になると考えられる。

仮説6 世帯の平均年齢が上昇すると、生活条件に対して否定的になる。

仮説7 世帯の平均年齢が高く、世帯人数が多い世帯では、生活条件に対して否定的になる。

以上から、次のように変数を定義した。

(A) 年齢

1：65歳以上、0：64歳以下

(B) 職業

1：有職、0：無職

(C) 世帯平均年齢

1：65歳以上、0：64歳以下

(D) 世帯人数

1：2人以上、0：1人

(R) 肯定観

肯定観については、「非常に良い」と「まあ良い」を肯定と定義し、「普通」と「それほど良くない」、「全く良くない」を反肯定と定義した。その上で、全事例のうち肯定事例が5割を越える場合1、5割以下の場合0と定義した。

1：肯定、0：反肯定

真理表（表9）に基づいて、肯定的意見を持つための条件をブール代数分析によって導出すると、以下のようになる。

$$R=B(c+d)+C(ad+AbD) \quad (4)$$

表9 真理表（生活条件肯定観）

	原因条件				肯定観事例数	全事例数	肯定観R
	年齢A	職業B	平均年齢C	世帯人数D			
1	0	0	0	0	0	0	-
2	0	0	0	1	1	2	0
3	0	0	1	0	1	1	1
4	0	0	1	1	0	0	-
5	0	1	0	0	2	3	1
6	0	1	0	1	9	11	1
7	0	1	1	0	4	6	1
8	0	1	1	1	0	2	0
9	1	0	0	0	0	1	0
10	1	0	0	1	1	3	0
11	1	0	1	0	4	11	0
12	1	0	1	1	3	3	1
13	1	1	0	0	2	3	1
14	1	1	0	1	4	4	1
15	1	1	1	0	3	5	1
16	1	1	1	1	0	3	0

一方、否定的意見を持つための条件は、次のようになる。

$$r=Abd+bcD+BCD \quad (5)$$

ブール代数分析の結果から、肯定的意見を持つ条件は次のようになる。第1に、本人が職業を持っている場合、世帯の平均年齢が低い世帯人数が少ないかのどちらかのときに肯定的意見を持つ傾向がある。第2に世帯構成員の平均年齢が高い場合、年齢が低くかつ世帯人数が少ない、もしくは年齢が高く無職で世帯人数が多いときに肯定的意見を持つ傾向がある。

ブール代数分析の結果を図示すると、さらに傾向がはっきりとわかる。図7に注目すると、有職

であること（図7の下半分）が肯定観にとって最も重要な要因であることが見えてくる。つまり基本的に有職であることによる当人の社会環境・生活環境といったものが、生活条件の肯定観に結びついている。ただ、有職であっても、世帯の平均年齢が高く世帯人数も多い場合には、肯定的ではない。つまり仮説5と仮説7を組み合わせた条件がデータに適合的であることがわかる。

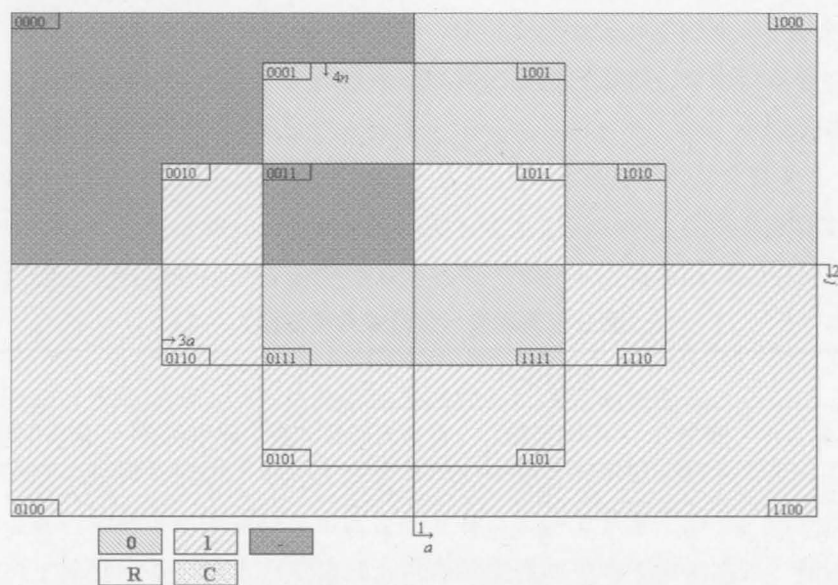


図7. 生活条件肯定観ブール代数分析結果図

一方、無職の場合（図7の上半分）は肯定的となる条件が少ない。無職の場合は、年齢との交互作用効果が見られるのが特徴である。つまり年齢が高い場合には、世帯の平均年齢が高くかつ世帯人数が多い条件のときに肯定的となる。これは仮説7の予想とはまったくの逆である。その理由は定かにはわからないが、高齢世代においては本人の属性や家族といった条件とは別の条件が存在しているのではないかと考えられる。逆に年齢が低い場合は、世帯の平均年齢が高くかつ世帯人数が少ない条件のときに肯定的になる。これは仮説7と部分的に適合的である。

## 5. 結論

### 5.1 要約

本稿では、主として4つの観点から小菅集落の社会的活動と生活環境に関する意識について検討してきた。その結果をまとめると、次のようになる。

第1に、小菅集落の環境に関する意識である。小菅集落の環境に関する意識については、自然環境は、7割5分の者が肯定的に捉えており、否定的に捉えている者は7%にすぎなかった。次に近隣関係についても6割以上の者が肯定的に捉えている。さらに生活条件については、肯定的意見が3割強とそれほど多くはなく、否定的意見が4割以上とかなり多かった。

第2に、近隣関係の実態について記述した。その結果から次のことが明らかとなった。

- (1) 集落役員や神社の活動は、比較的多くの者（半数程度以上）がおこなっているが、グループ活動や同族交流については、3割程度とあまり多くない。
- (2) 4つの活動すべてをおこなっている者はほとんどなく、2ないし3の活動をおこなっている者



が大半である。

(3) 4つの活動の組み合わせは、集落役員を経験したグループとどの社会的活動もおこなっていないグループに大きく分かれる。

(4) グループ活動と同族交流をともにおこなっている者はほとんどいない。

第3に、近隣関係の肯定観の規定因について検討した。その結果から次のことが明らかとなった。

(1) 近隣関係の肯定観につながる条件は、3つある。第1にグループ活動をしている場合、第2に神社活動をしていないが世帯人数の多い場合、第3に世帯人数が少なく年齢が高い場合である。

(2) 社会的活動、世帯人数において同じ条件であっても、年齢が高いか低いかによって意識に差があらわれる。

(2)ー1. 高齢世代の場合、フォーマルな社会的活動や家族を通じたネットワークがなくても、近隣関係に対して肯定的になる。

(2)ー2. 若年・中年世代の場合、フォーマルな社会的活動や家族を通じたネットワークがあると、近隣関係に対して肯定的になる。

第4に、生活条件の肯定観の規定因について検討した。その結果から次のことが明らかとなった。

(1) 有職かつ世帯の平均年齢が低いもしくは世帯人数が少ない条件のときに、生活条件に肯定的となる。

(2) 無職の場合、年齢によって肯定観の条件が異なる。

(2)ー1. 高齢世代の場合、世帯の平均年齢が高くかつ世帯人数が多い条件のときに肯定的となる。

(2)ー2. 若年・中年世代の場合、世帯の平均年齢は高いが世帯人数が少ない条件のときに肯定的となる。

## 5.2 結論

分析結果から、注目すべき点について最後に考察していくことにしよう。

第1に、全体としていえることは、小菅集落の自然・生活環境に対して世帯主はおおむね肯定的であるということである。客観的には過疎化と衰退が進行している山村集落であり、都市部に比べて利便性に優れているわけではないし、決して明るい展望があるわけでもない。それにもかかわらず、そこに住む人々は小菅集落に対して好意的である。もちろんそうした意識を持つ人々が小菅に住み続けているとも考えられ、意識に偏りがあることは否めないが、小菅はそこに住む人々にとって、外側から見るとは、はるかに心地のよい土地であるといえるに違いない。

第2に、社会的活動はそれほど活発というわけではない。集落役員や神社の活動はかなりの世帯でおこなっていたが、これは集落の規模が小さいことによるものとも考えられる。一方グループ活動は3割程度でありかならずしも多いとはいえない。また同族交流も3割5分程度と多くなく、内容も冠婚葬祭に限られており、活発な交流がおこなわれているともいえない。このことから、小菅集落もまた、他の山村集落と同様、戦後の近代化、都市化の波の影響を受けていることが考えられる。

第3に、肯定観には、本人の属性、家族の特性が影響している。この事実は特段珍しい事実ではないが、その影響の仕方が高齢世代と若年・中年世代で異なる点は、注目に値するだろう。特に高齢世代の意識は、近隣関係に対する肯定観であれ生活条件に対する肯定観であれ、本稿で取り上げ

た要因では捉え切れていない。客観的状态としては、必ずしもよいとはいえない状況であっても肯定的な意識が強い。逆に若年・中年世代ではそうした要因が見られず、本稿で提示された仮説の範囲内で説明可能である。

高齢世代では本稿で取り上げた変数によって説明できない理由として、2つの可能性が考えられる<sup>12</sup>。第1の可能性は、属性や家族の特性、あるいはフォーマルな人間関係で捉えられる生活環境ではない、環境要因が影響していると考えられる。それは例えば、本稿で取り上げることができなかったインフォーマルな人間関係などがありうるだろう。第2の可能性として、単に現時点での客観的状态ではなく、長い間小菅集落に住んできた歴史、記憶が小菅集落に対する意識に影響しているのかもしれない。そもそもわれわれがその土地に対して持つ意識は、ある一時点の状態に対してというよりは、ある範囲の時間の中で変化している状態によって形成されているとも考えられる。そうであるならば、高齢になるほど現在の属性、社会状況等からは乖離してしまう可能性はある。

小菅集落の今後を考えた場合、こうした高齢世代と若年・中年世代の相違がなぜ生じるのかという点をさらに検討していく必要があるだろう。おそらくこれまでの小菅集落は、インフォーマルな人間関係を通じて、近隣関係を良好にし、生活条件を補ってきたのではないだろうか。ただ若年・中年世代においてはフォーマルな人間関係（家族やフォーマルな近隣関係）が肯定観を規定しており、インフォーマルな人間関係の影響が見られない。このことを考えれば、これまでインフォーマルな人間関係が果たしてきた役割、機能をどのように代替し、集落の人間関係を維持し、良好な生活環境を整えていくのが重要となるであろう。

## 参考文献

- Conquvist, L. 2003. Tosmana: Tool for small-n analysis. Version 1.1. Marburg: University of Marburg; Online in Internet: <http://www.tosmana.net/>.
- Drass, K and C. Ragin. 1998. QCA. Version 3.0: Online in Internet: <http://www.u.arizona.edu/~cragin/fsqca.htm>.
- 鹿又伸夫・野宮大志郎・長谷川計二編. 2001. 『質的比較分析』 ミネルヴァ書房.
- 村山研一. 2004. 「山村集落の世帯と農業：飯山市小菅集落調査報告 第一報(1)」 『内陸文化研究』 3: 1-12.
- 中原洪二郎. 2004 「住民の意識から見る山村集落の現状と将来：飯山市小菅集落調査報告 第一報(3)」 『内陸文化研究』 3: 27-34.
- Ragin, C. C. 1987. *The Comparative Method: Moving Beyond Qualitative and Quantitative Strategies*. University of California Press. (鹿又伸夫監訳. 1993. 『社会科学における比較研究：質的分析と計量的分析の統合にむけて』 ミネルヴァ書房)
- 渡邊勉. 2004. 「山村における社会移動：飯山市小菅集落調査報告 第一報(2)」 『内陸文化研究』 3: 13-26.

<sup>12</sup> 一般的に若年者よりも高齢者の方が現状肯定的になりやすいという点も考慮する必要があるだろう。